

ところが会堂に、汚れた悪霊に取りつかれた男がいて、大声で叫んだ。「ああ、ナザレのイエス、構わないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った。人々は皆驚いて、互いに言った。「一体、この言葉は何だ。権威と力とをもって汚れた霊に命じると、出て行くとは。」こうして、イエスの噂は、辺り一帯に広まった。(ルカ福音書4:33~37)

主イエスは、故郷ナザレの会堂では「この人はヨセフの子ではないか」と、出自や生い立ちを肉の目で見られ、解き明かす神の真実を受け止めてもらうことができなかった。

「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と言い、預言者エリヤとエリシャが自国の民ではなく、異教の人を救ったという故事を話すと、会衆は憤慨し、彼らに山の崖から突き落とされそうになった。危く難を逃れて、また、ガリラヤに戻られ、カファルナウムに下って来られた。

カファルナウムで安息日を迎え、いつものように、会堂で教えておられた。人々は、主イエスの語られる権威ある教えに驚いた。ファリサイ派の人々の教えは、形式的な律法の解釈と律法を厳守するよとの脅迫めいた教えで、会衆は聞き飽き、うんざりしていた。主イエスはご自分の実存をかけた、生き生きした言葉で、神の恵みのリアリティを解き明かしたので、人々は権威ある言葉として聞き入った。

その会堂に、汚れた悪霊に取りつかれた男がいて、主イエスを見て、「ああ、ナザレのイエス、構わないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」と大声で叫んだ。これは極めて奇妙な出来事である。会衆は、主イエスの教えに驚いて聞いていたが、悪霊に取りつかれた男は、主イエスを見て、滅ぼされると恐怖を感じ、主イエスを神の聖者だと、正体を見抜いている。神から最も遠い悪霊が、主イエスに「神の聖」を見て、恐れたということである。福音書には、主イエスと悪霊の出会いがしばしば記されているが、悪霊は常に主イエスを恐れ、苦しみもがいている。パウロはローマ書5章20節で「律法が入り込んで来たのは、過ちが増し加わるためでした。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れました」と書いている。暗い罪が支配する世界では、恵みが一層明るく輝く。「罪」と「聖」は真逆であるが、真逆であるから、相手を鋭く認識するのである。

主イエスが、「『黙れ。この人から出て行け』とお叱りになると、悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った。」主イエスの宣言によって、悪霊は男を投げ倒したが、傷を負わず、出て行った。彼は正気に戻されたのである。人々は皆驚いて、「一体、この言葉は何だ。権威と力とをもって汚れた霊に命じると、出て行くとは」と互いに言い合った。主イエスの噂は、辺り一帯に広まった。

悪霊に取りつかれるとは、この世の何ものかを絶対的なものとし、心と体が支配されることである。この世のものは皆、それなりの意味と価値を持っているが、その意味、価値以上のものと錯覚し、他が見えなくなる。天皇制、権力、財力を至上の価値と考え、これを得るために、命をも軽視するのが悪霊の働きである。著者ルカは、主イエスにおける神を拝する時、悪霊から解放される福音に与ることができると宣教している。